

認識の華としての水晶玉

——『水晶玉』（KHM一九七）の深層心理学的解釈——

梅 内 幸 信

第一節 謎の提出

オイデイプスは、父親を殺し、母親と交わるといふ恐ろしい神託の実現を回避するために、自分の育ったコリントスの国を離れ、テーバイの国へと向かう。しかしながら、テーバイこそ、自分が生まれた国なのであった。その旅の途上、オイデイプスは、道を譲る譲らないというささいな争いから、父親であるライオス王を殺してしまう羽目となる。オイデイプスの向かったテーバイの国は、旅人に謎をかけ、それを解けなければ殺してしまうという恐ろしい怪物スフィンクスによる災いによって苦しめられていた。そこで、テーバイの国の妃であるイオカステが、このスフィンクスを倒した者には、自らがその者と結婚し、王位を与えるというおふれを出したのであった。オイデイプスは、見事スフィンクスの提出する謎を解くと、スフィンクスは、絶望して、火山に身を投げて死んでしまうのである⁽¹⁾。

旅人に謎をかけ、それを解けなければ殺し、逆に、それが解かれれば、自らが絶望して自殺するという行動パターンも極端なものであるが、しかし、そこには「謎の提出」に関するある一つの秘密が隠されているように思われてならない。

通常、極めて激しい受験戦争においてすら、たとえば、教師が生徒に数学の難問を課し、たとえ生徒がその問題を解けないにしても、教師はその生徒の命を奪いはしないし、また、その問題を生徒が解けたにしても、教師はそれで絶望して自殺するなどということは起こりえない。ただし、スフィンクスの行動パターンを、トラウマの性質と比較してみると、スフィンクスの行動パターンは、実に明瞭に理解されるものとなる。つまり、トラウマは、セラピストの療法を通じてゴスの光を照射され、その在りかを突き止められ、分節化されて解釈されるとき、その悪影響を及ぼす力を失って、消滅する定めにあるのである。⁽²⁾

「謎の提出」は、童話において、トラウマと結び付いているとは一概には言えないかも知れないが、しかし、少なくとも「不可思議なもの」という本質的な要素と不可分に結び付いていると思われる。不可思議なもの見られない童話は言うまでもなく、謎の提出の見られない童話は、謎の提出の見られない探偵小説と同様に、読者を魅了する力が弱いと考えるざるをえない。

『水晶玉』(KHM一九七)と題される童話は、第七版において二〇〇の童話が収録された『グリム童話集』の末尾に位置している。しかも、この童話は、第六版に至つてようやく、第一九七番目の話として『グリム童話集』に収録されたという事実からしても、ややもすれば、グリム童話の主流に属するものではないという印象を読者に与えるかも知れない。⁽³⁾ また、この関連において『水晶玉』は、当時好評を博した『グリム童話集五〇話』にも収録されていないゆえに、⁽⁴⁾『白雪姫』や『赤ずきん』、『灰かぶり』といった、いわゆる典型的な「グリム童話」と比べれば、確かにそれほど人口に膾炙しているとは言いがたいところがある。しかしながら、この童話は、そのタイトルの中にある「水晶」という語によって、童話研究者の心を惹きつける力をもっている。試みにそのイメージとシンボルを探ってみると、水晶は、「透明なことから、対立したものの結合」と「純粋性」を表し、「知恵、直観的知識、思想の半透明性、精神、知性を表す宝石」⁽⁵⁾である

と言われる。これだけの情報が与えられるだけで、童話解釈者は、この童話に不思議な魅力を感じずにはいられないであろう。ところが、この童話における謎に誘われて、この童話の解釈を進めてみると、最終的には、驚くべきことに、元型から成る心的発電機の秘密が垣間見られてくるのである。

実際、この童話を一読すれば、不思議な魅力と同時に、かなり多くの謎がこの童話の中に見いだされる。たとえば、その冒頭において魔女である母親は、自分の三人の息子が自分の権力を奪おうとしているのだと思ひ込み、長男を「ワシ」に、そして、次男を「クジラ」に変えてしまう。しかし、三男だけは、自分をクマかオオカミに変えようとする意図を察知し、いち早く母親のもとから逃亡してしまふ。それにしても、ワシに変えられた長男とクジラに変えられた次男という事態は、一体なにを意味しているのだろうか。これが、まず第一の謎である。

また、母親のもとから逃亡した三男は、この時点ですでに「黄金の太陽のお城（おうごんたいようのおしろ）」には、魔法（まほう）をかけられたお姫さま（ひめ）がいて、救（すく）いだされるのを待ちこがれているというお話（はなし）⁽⁶⁾」を聞き及んでいる。たとえば、姫を救（すく）いだそうとする三三人もの若者が、その救出に失敗して命を落としたという噂を耳にしても、この「こわいものなし」の三男は、姫の救出を決心するのである。この三男が一旦姫の救出を決心して、旅に出かけると、奇妙なことに、姫の救出に関する試練は、あたかもイバラ姫を護つて、城に侵入しようとする王子を百年間撃退してきたイバラが、ちょうど百年経つと自動的に開くかのように、ここごとく克服されてしまうのである。まず三男は、「黄金の太陽のお城」へ行く道を見つけたさねばならない。ところが、この若者が、とある森に入ると、二人の大男が、望みの所へどこへでも瞬時に行けるといふ「魔法の帽子」(S.416)を巡つて戦っている場に遭遇する。すると、この若者は、その審判を引き受けるが、魔法の帽子を受け取るや、まもなく自分の仕事を忘れて、黄金の太陽の城に行きたいという願望をつい口にだしてしまふ。これによって若者は、難なく目的の城の前にたどり着くことができるのである。城の一番奥の部屋に若者は、めざす姫を発見するが、予期に反して、その姫の顔

は、「灰のように白茶け、しわだらけで、目はドロロンとし、髪は赤毛」(S.416)なのであった。しかしながら、涙ながらに語る姫の話によると、姫の姿は魔法によつて醜い姿に変えられているとのことであつた。姫は、人の目には醜く映るものの、実は鏡に映して見ると、大変な美人なのである。

そこで若者は、姫を醜い姿に変えている魔法を解くと言われる水晶玉を手に入れる方法を姫に尋ねる。すると姫は、若者にその方法を教えるが、その方法とは、次のように、大変奇妙なものであると同時に、大変困難なものである。

「このお城のある山をくだりますと、ふもとの泉のそばに二匹のオスの野牛がいるでしょう。あなたは、この野牛と戦わねばなりません。もし、しゅび良くこの野牛を殺せると、そのお腹から一羽の火の鳥が飛びたつでしょう。この火の鳥は、そのお腹に燃えさかる卵を一つもつていて、その黄身は水晶でできているのです。けれど、火の鳥は、落とすようせつつかねなければ、その卵を落とさないのです。でも、卵が地面に落ちますと、発火して、そのまわりにあるものをすべて燃やしてしまい、やがて、卵そのものもとけて、それといっしょに水晶玉もとけてしまいますから、あなたの苦勞は、みんな水のあわになつてしまふでしょう。」(S.417f.)

確かに、童話において、人間の感情は細部描写されず、物語は「一次元的に」描写されるゆえに、若者の勇敢な戦いぶりが迫真力をもつてリアルに描写されないのも、納得のゆくところである。しかし、それにしてもこの童話における戦いの場面においては、三男の戦いぶりというよりは、ワシに変えられた長男とクジラに変えられた次男の戦いぶりの方が目立つと言わざるをえない。三男が苦戦の末、野牛を倒すと、そのお腹から火の鳥が飛び立つ。すると、長男のワシが雲間から現れ、火の鳥を目がけて急降下し、火の鳥を海の方へと駆り立て、その嘴で火の鳥に激しい突きを入れる。その結果、

火の鳥は、たまらずにお腹の中にあつた卵を落としてしまう。この卵が漁師たちの小屋へ落ちると、卵は発火して、その小屋は、たちまち煙を吹き上げ、燃え上がらんばかりとなる。しかし、次男のクジラが海水を盛り上げ、「家いえのように高い波なみ」(5418)でその火を消してしまふのである。こうして、若者は、水晶玉を手に入れ、それでもって魔法使いの魔力を打ち破り、それと同時に、長男と次男にも人間の姿を取り戻してやることができる。最終的に、若者は、もとの美しい姿に戻った光り輝く姫と結婚するのである。

このハッピーエンドは、童話に典型的なものであるが、しかし、一人の若者が、たとえ二人の兄弟の援助があるとはいえ、次々と大きな試練を乗り越えて、一直線に目的を達成する童話は、二〇〇に上るグリム童話の中でも、極めて珍しいものであると判断される⁽⁸⁾。しかも、このハッピーエンドには、不思議な爽快感が看取される。それどころか、男性の読者であれば、この若者と一体になりたいという憧れの念すら掻き立てられ、最後に姫を獲得する場面においては、一種の崇高な感動すら覚えるのである。とはいえ、このことを説得力をもって証明するためには、やはり、これまで列挙してきた諸々の謎を、まずは説明せねばならぬであろう。

第二節 「ワシ」と「クジラ」の意味

女魔法使いは、自分の息子たちが自分の権力を奪おうとしていると曲解して、長男をワシに、そして、次男をクジラに変えてしまう。ここで、まず注目すべき点は、ワシが空を住み家とする猛禽であり、他方、クジラは海を住み家とする巨大な哺乳類であるという局面である。その住み家は、空と海という具合に対極的な位置にある。ワシにしてもクジラにしても、それなりの存在価値をもつものではあるが、とはいえ、魔女が敵意から自分の息子たちを変えるのであるからして、

それらの存在は、少なくとも彼女よりは低い存在であり、否定的存在であると見なさざるをえないであろう。ただし、ここで記憶に留めておかなくてはならない点は、ワシに変えられた長男にしろクジラに変えられた次男にしろ、二人には、たとえ一日のうち二時間であるにせよ、人間の姿に戻ることができるという前提条件が付けられていることである。⁹⁾

さて、イメージとシンボルによる解釈学の観点から見て、「ワシ」の肯定的意味としては、「王者の威厳、権力」（イメージ・シンボル、一九五頁）の象徴が存在すると同時に、中世のキリスト教においては「誇り」「能力」「力」「速さ」「若さ」というエンブレムが存在する（イメージ・シンボル、一九七頁）と言われる。他方、「クジラ」の肯定的意味としては、「生命の船」「魂を容れる肉体」（イメージ・シンボル、六八八頁）という象徴が存在する。事実、これらの動物がもつ肯定的側面が、ワシに変えられた長男とクジラに変えられた次男に付与されていると考えられる。長男は、三男を助けるために、火の鳥が野牛のお腹から飛び立つと、雲間から現れて、火の鳥を目がけて急降下し、その鋭い嘴で火の鳥に激しく突きを入れる。このワシに特徴的なことは、その「目の鋭さ」と「獲物を追撃する激しさ」である。また、火の鳥の卵が発した火を、海水の大波を作って消すクジラに特徴的なことは、その巨体から連想される「途方もない無意識的力」である。

しかしながら、ワシもクジラも、なんらかの意味において否定的な存在として描写されているとすれば、イメージとシンボルに関しても、その否定的側面を探らねばならぬであろう。ワシは、その眼光の鋭さからの連想によって、「冷徹な知性¹⁰⁾」を想起させる。そして、その追撃の激しさを加味すれば、「冷徹な知性に秀でた秀才」というイメージが形成されてくる。つまり、平たく言い換えれば、物語に登場する母親は、長男には厳しく接し、なにごとにも妥協を許さず、その知性のみを助長させたと考えられるのである。他方、クジラは、否定的側面としては、「知性がなく、力だけで、苛酷な自然の力」（イメージ・シンボル、六八三頁）をもっている。従って母親は、次男の方は、長男の養育方法の反省に立つ

てかどうかは定かではないものの、長男とは正反対の養育方法を取って、勝手気ままに育てたと考えられる。

現代の風潮に照らして解釈すれば、受験競争において勝利を収めさせたいと願って母親は、息子に対する盲目的愛情から、長男に対しては、ことあるごとに厳しく接し、その知性のみを助長させて、いわゆる受験対応型の秀才に長男を育て上げたと考えられる。しかし、その長男は、冷徹な知性と他人の粗を探す性格の激しさのみを獲得し、物心がつくや母親を痛烈に批判し、全く独善的にして、妥協を許さない利己主義者となる。これを見て母親は、次男に対しては長男とは完全に反対に、優しく接し、それどころか、甘やかし放題に育て、好き勝手にさせておく。こうして、次男は、冷徹な知性こそないものの、途方もないエネルギーをもった、ボヘミアンのような芸術家、あるいは暴走族のような若者に育て上げられたと考えられる。

ところで、自分の長男と次男をこのように両極端に育て上げる母親は、好ましい母親とはいえない。とはいえ、現実には、この種の母親は数多く存在していると言わざるをえない。それは、否定的な母親像であるが、この母親の否定的側面は、童話においては往々にして、「継母」として登場する⁽¹⁾。この童話においてそれは、「魔女」として登場している。通常、継母は、母親の厳しい側面を代表しているが、この童話で魔女は、母親の「否定的側面」を代表していると判断される。このように考察してみると、この物語において、黄金の太陽の城で姫を魔法にかけて醜い姿に変えた「魔法使い」は、魔女とは反対に、父親の否定的側面を代表しているという推測も可能になってくる。この魔法使いが姫の父親であるという関係は、物語の筋からは看取されえない。しかし、魔女が魔法によって自分の長男と次男を、それぞれワシとクジラに変えたという事態を踏まえれば、姫を魔法にかけて醜い姿に変えた魔法使いが、実は姫の父親であるという推測も、全く根拠のないものとは言えないであろう。姫を救出しようとする若者に難題を課して、二三人もの若者の命を失わせたのであるから、この魔法使いは、娘を愛するあまり、「箱入り娘」として育て上げ、自分の課す試練を克服できる若者しか自

分の娘の花婿として認めないといった厳しい父親を想起させる確かな局面をもっている。この関連においても、魔女と魔法使いは、対立関係にある。そして、この対立関係は、否定的な意味における、母親と父親、場合によってはユングの元型理論におけるグレート・マザーと老賢人の関係を暗示しているとも言えよう。

第三節 無意識界の極性

『水晶玉』という童話を物語における対立項に着目して、さらに分析を進めると、この物語には、もう一つ大きな対立項が見いだされることが分かる。それは、三男が森の中で遭遇する二人の大男同士の戦いの場面においてである。二人の大男たちは、「魔法の帽子」を巡って争っている。大男たちの話によれば、この帽子をかぶれば、どこへ行くのも望みしだいであるという。「帽子」は、フロイト流に解釈すれば「男根」の象徴として解釈される可能性をもっている。が、この場面においては、より具体的に考えると、「父権」の象徴と解釈できるであろう。つまり、二人の大男たちは、父権を勝ち取ろうと戦っていたのである。とはいえ、この帽子を獲得したとき、「望む所にどこへでも行ける」という不思議な力は、どのように解釈されるのであろうか。この解釈に当たっては、まず童話における場面転換の様式を考慮に入れる必要がある。

童話においては通常、事件の詳細が語られることはない。物語における事件は、その概要が簡潔な言葉によって力強く語られるのみである。従って、この童話においても、「黄金の太陽のお城」は、現実的に考えれば、かなり遠方にあると想定される。また、『指輪物語』のような長編小説であれば、この種の長い旅の途上で様々な冒険が展開されることであろう。しかしながら、童話においては、場面の転換が一見唐突と思われるような方法で行なわれるのである。¹²⁾『水晶玉』

